

まえていて家財道具の略奪を始めた。

父が帰ってきて母と赤ん坊と時枝さんの四人で駅に行くのに困っていたら、父のところにも来ていた二人の中国青年は荷物を背負って、時枝さんの手を引いてくれた。駅についた父は、この青年に物や金をあげようとしたが、受けとらずに別れた。

宣化駅から北京、天津に着いたものの弟が高熱を出し、母も体調が悪くなり二人とも天津病院に入院した。医師から弟は今夜危険だと宣告されたが、翌々日、弟は奇跡的に命を取り止めた。

天津外港の塘沽港から出発し、三日目に博多についたのは十月二十八日であった。父の故郷佐賀の祖父の家につくと、祖母は泣きながら風呂を焚いてくれた。時枝さんは日新国民学校に転入したが、父が職業を変わる度ごとに住居も変わり、時枝さんは六回も転校。母は身も心もぼろぼろになって四十五歳で病没、父も十二年前に亡くなった。

昭和六十三年、S教員が退職後、日本語の教師として中国の張家口市にいたので、その人を頼りに時枝さ

んは宣化県を訪ねて、幼年時の生活を回想して万感ごもごも涙を流された。

(社引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)

ホロンバイルの花のたね

長崎県 田中 長子

長崎より満州へ

昭和十九年五月、姉婿が興安北省索倫旗公署に勤務して、姉にとって初めてのお産なので、手伝いながら来て欲しいとの手紙を受け取った。常々あこがれていた満州の大地に行くことができると、期待と希望に胸膨らませて喜び勇んで、勤めていた佐世保市日字小学校を退職し、青葉薫る日本を後に、魚雷の浮遊すると噂のある下関海峡を船で朝鮮の釜山に渡り、釜山からハルビンまで汽車に乗り、二等車の客となった。広軌鉄道の二等車は乗り心地がよく、見る物聞く物

すべて珍しく、ハルビン駅まで迎えに来てくれた義兄と、ロシア歌劇を見たり、今まで食べたこともないすてきなロシア料理を御馳走になった。その後また汽車に乗り、満州のすばらしい山野を走り待望の海拉爾駅（ハイラル）下車、旗公署より迎えの二頭立ての馬車に乗り、姉の待つ索倫旗南屯の官舎に向かった。

ホロンバイル草原で

南屯には索倫旗公署があるので、そこに勤務する日系、満系職員や警察官の官舎が点在していた。ここホロンバイルの広さは北海道の二倍ほどで、住民のほとんどは遊牧民の蒙古人で、畜産を主に生活していた。ホロンバイルの澄み切った青い空、果てしない大草原、ピンク色の美しい興安桜、黄や紫の鮮やかな高山植物の咲き乱れる中で、牛や羊が何百となく群れをなして移動するさまは、まさに壮観だった。

湖の傍らには蒙古包の集落があり、太陽が西の空を真っ赤に染めて地平線の彼方に沈むさまは、たちまち私の心をとらえた。虐げられて家庭的に不遇だった私にとって、何と自由なすばらしい毎日だったでしょう

……。朝な夕な神仏に感謝の日々を過ごした。

南屯には国民優級学校がありました。特務機関員だった御主人がノモンハン事件で亡くなられ、蒙古女子教育に献身的に活躍しておられた高塚繁先生が、蒙古人婦女子のために補修科を開いておられました。

この蒙古人子弟のための南屯国民優級学校に赴任した私は、日本語をはじめ、算数、図画、体操などの指導に当たり、補習科では音楽、ダンス、体操、日本語、洋裁などを受け持っていた。環境は申し分ないし、食料は米も砂糖も絹製品なども豊富で、この地にこれたことは心から嬉しく思っていた。

そのうち、高塚先生のところに入入りしていた軍医の方との縁談があったり、心はずむ毎日だった。姉の出産も無事に済み、かわいい女の子が生まれて純子と名づけられ、平和な生活が続いた。

冬は零下三五度、シュエバと毛皮の帽子、フェルトで作った靴か毛皮のついたブーツがないと外出できなかったが、部屋の中は暖房がきいていて暖かく、玄関の二重扉の間に羊の肉をつり下げ、凍った肉を切りと

つては料理に使っていた。たまに和服を着て袴をはくと、白足袋と袴の間が寒さで真つ赤になった。

官舎住まいは若い夫婦がほとんどで、遠い外地に来ている関係で、皆とても親密感があった。

昭和二十年四月初め、高塚先生が東奔西走され、生徒や私たちも何日もかかってれんがや砂運びに汗をだし、やっと、念願の女子国民高等学校の建物が出来上がり、新しい立派な校舎で開校式を終わって、蒙古婦女子教育の第一歩を踏み出したばかりだった。

ソ連参戦

昭和二十年八月九日、乳牛十二頭の冬の飼料を蓄えるため、高塚先生と生徒数十人を引率して、ホイソールのブリヤート族の放牧地で、牧草刈りに従事していた。

その朝は雲一つない晴天で、幼い時亡くなった母の命日になるので、日本の方角に向かい合掌していた。

「お母さん。私は今、満州の西北の果てに來ています。お陰さまで平和に幸福に暮らしています……」 すると飛行機が数機、爆音高くハイラルの方に飛び去った。

旅客機ぐらいに思ってた気にもとめなかったが、間もなく、ハイラルが爆撃されたそうで、そんなことは露しらず、その日も一日のんびり大きな鎌で草を刈り、疲れた体を馬車に横たえ、心地よい眠りに陥っていた。突然、蒙古犬の激しくほえる声で、索倫旗公署からの騎馬の使いが来たことを知らされた。

「ソ連が参戦しハイラルを攻撃している。早く逃げろ」寝耳に水だった。まだ眠っている生徒を起こし、馬に乗れる者は馬で、乗れない者は馬車で、闇の中を無我夢中で走り続けた。生徒をそれぞれ家に送り届けた私は、はだか馬に乗りつづけたために、股ずれがして歩けなくなってしまうた。

最後に送り届けた生徒の家で、蒙古娘に変装させてもらい、家事を手伝って数日を過ごした。

そのうち、「満州国の兵隊が反乱を起こし、日本人は皆殺しにされる」という噂が流れてきたので、高塚先生と二人で、生きて辱めを受けるより死を選ぼうと話し合った。お湯を沸かし体をふき、髪をといて三つ編みにして、剃刀でのどを突こうとした。万感胸に迫

って言葉が出ず、涙がほほをつたわった。一瞬、父母姉妹の顔が脳裏に浮かんだ。先ほどから心配していたらしい生徒の父親が飛び出してきて、「逃げたらどうですか、逃げるだけ逃げて、もしどうしても窮地に陥ったときは、改めて考えても遅くないでしょう」と忠告してくれた。

生徒たちも「先生、石にかじりついても生き抜いて、日本に帰ってください」と泣いて別れを惜しんでくれた。もう生きて会えることもないだろう。南満州ならともかく遠い北満の地では、同胞の住む地区まででも、たどり着ける自信もない。

興安嶺へ

そこへちようど、東に向かう関東軍のトラックが通りかかった。七、八人の兵士が乗っていたが、女は足手纏いになるからと言って乗せてくれない。「どうせ死ぬ覚悟はできています。ご迷惑かけぬようにしますから」と必死に頼みこんでやつと乗せてもらった。興安嶺の坂道を登り始めたところでガソリンがなくなり、一晚、そのトラックの下で夜を明かした。翌朝、残り

のガソリンをそれにかけて燃やしてしまった。それからはずかばかりの衣類を振り分けにして肩にかけ、興安嶺の西斜面をただ太陽の昇る方向の懐かしい日本を求めて歩き続けた。

この地方は、草が茂って小動物がたくさん棲んでいる。それをねらう狼の群れがいて、夜は交代で焚き火をするのだが、その遠吠えが耳についておちおち眠れなかった。山に登っては下って湿地帯を歩き、また登っては湿地帯を歩くので、運動靴がボロボロになった。兵隊さんのお米や乾ばん、蒙古人からもらったアツチ（牛乳から作った携行食）もなくなつて、三、四日も食べるものがなく、前方遙かあなたに見える青い野菜らしきものをめがけて、夢遊病者のように歩いた。夜は畑に積んである茅の中にすっぽり潜りこんで、首だけ霜に打たれたりして寝た。その間、ソ連機の機銃掃射を受け、もう駄目だと思つた。あの恐ろしさは経験したものでなければ分からないでしょう。

何日間どこを歩いたかもわからない。あるとき前方にソ連の戦車がやってくるのが見えた。一人の兵隊さ

んが偵察に行かれ、しばらくして「ズドン」と銃声があった。草むらに隠れていた私は、足が震えて身のすくむ思いだった。

話し声がするので、恐る恐る顔を上げると、さっきの兵隊さんが、野放しの蒙古馬を見つけ、銃で撃って引きずってこられたらしい。日本人が住んでいて空き屋になった家に行き、兵隊さんが馬を解体し、塩焼きにしたり、ゆがいたりして腹いっぱい食べた。四日近く食べていなかったもので、その馬肉のおいしかったこと……。その味は二度と味わうことはないでしょう。

興安嶺を越える鞍部の博克図ボクヒョ近くで、伐採夫たちの部落に着くと、「このまま博克図に行けば、ソ連軍の捕虜になるのだから銃は置いていけ」と言うのを断って、彼らが日本軍の倉庫から盗み出した米、肉、缶詰などを分けてもらい、山に立てこもるため朝早く出発した。

襲撃

百歩も進まぬうち、急に小銃弾が雨のようにふり注いできた。さっきの部落民が撃ってきたらしい。兵士

は応戦しながら山に向けて逃げられたが、草に伏せていた私と高塚先生と足に負傷していた兵士は、そのままその雨の中にじつと身を伏せていた。

初めて聞く断末魔の悲鳴。すぐ後ろに伏せておられるはずの高塚先生を振り返ろうとした瞬間、左大腿部に鉄棒でなぐられたような衝撃を受け、そのまま気を失ってしまった。

どのくらい時間がたっただろうか、何かに引つ張られたような気がして、意識をとり戻した。

部落の子供が肩にかけていた鞆をとりょうとして、引つ張ったものらしい。死んでいると思つた日本の娘が急に目を開けたものだから、子供の後ろ姿と逃げ出す足音だけが、私の意識を揺り動かした。起き上がろうとしたが、左足が骨折していて動くこともできない。弾丸が左大腿部の骨に当たって肉がえぐりとられ、左手でさわってみると真っ赤な血のりで、見ただけで気が遠くなりそうだった。こんなに出血しては助からぬと思つた。ものすごくのどが乾くので、このまま死ぬのなら水を飲んで死にたいと思つた。肩にかけていた

水筒の水を思いきりゴクゴクと飲んだ。興安嶺の山中で口にした末期の水の味は忘れられない。こんな異国の山中で、だれ一人看取る者もなく、死んで行く自分がいかにも哀れで止めどもなく涙が流れ、汗とほこりにまみれた衣類を濡らした。何とかして日本に帰りたいという気持ちが、心の底から湧いてきた。

話し声が出て、先ほどの子供や親たちがやってきて、もと日本人が住んでいた空き屋に板の上にのせて運んでくれた。負傷して歩けない娘を哀れに思ったのか、うどんや麦粉で焼いた餅を運んでくれ、その上、下の始末まで手伝ってくれた。数日後、傷口が化膿して蛆がわいたが、起き上がれない身には、どうすることもできなかった。枕元では独身の伐採夫たちが、銃を玩具にしながら、「この姑娘（フレイマ）（娘）をだれの太々（たいたい）（奥さん）にするか」と相談している。こんな山奥の木こりの好き勝手にされてたまるものか、足がよくなり歩けるようになったら命懸けで逃げようと、そればかり考えて過ごした。

日本人の中に

一週間ぐらいたったある日、だしぬけにソ連の兵隊が馬車をひいてやってきた。どんな目に遭うのかと思うと恐ろしさに、「連れて行かないで」と泣き叫んだ。「博克図の日本人がいる所に連れて行ってやるのだ」と言われても信じることができず、博克図に着くまでの馬車の中で、涙がかれるほど泣き続けた。今度こそソ連兵たちのおもちゃにされて、めちゃくちゃにされてしまいうに違いないと思った。

着いた博克図では、何人かの日本人の男子と男装した婦人たちがいた。興安嶺の頂上は、もう早々と冬の気配を見せていた。何日かたって、足の傷がますます化膿して、日本軍の陸軍病院に入れられた。避難中の娘さんが親切に付き添いをしてくれた。そこにいた医師と看護兵は、次々に姿を消してどこかに行ってしまった。後で聞くとソ連領に連れて行かれたらしいとのこと。私はまたソ連兵が迎えにきて、今度はソ連軍の野戦病院に馬車で運ばれた。

シベリアへ

一晚、担架に乗せられたまま病院で過ごした私は、

次の朝、トラックに積まれて博克図の駅へ運ばれ、そのまま貨車に積みこまれた。貨車は真ん中にストロップが燃えており、両側の棚に何十となく担架が並んで、ソ連兵や中国人兵士の負傷者が寝ていて、一人の赤毛の看護婦が食事から下の始末までしてくれたが、担架に寝たままで日数も景色も全然分からなかった。そして、私たちを乗せた汽車はそのまま西に走って、それまで私が住んでいたハイラルを通り過ぎて、シベリア国内に入ったことを間もなく知らされた。

ゴトゴトとどこに行くかも分からず、ずいぶん長い間汽車に乗っていたように思ったが、貨車の旅は三日ぐらい続いて、もう日本とはこの世では別れを観念せざるを得なかった。その後、停車しては走ったりして、ソ連領ダウリヤで汽車が止まると、今までのじゃが芋にバターをまぜたような主食が変わって、温かいオートミールに肉が入ったスープが配られた。食事が済むと、トラックで大きな陸軍病院に収容された。

シベリア暮らし

その病院の入り口で、今まで着ていた日本の白衣を

ぬがされ、天竺木綿の股下と衿のないシャツを着せられた。

部屋にはソ連軍将校の家族が入院していて、ベットに羽根枕、食事は朝晩白パン一斤ずつ、昼食は黒パン、副食は小型の洗面器のような食器に米を牛乳で炊いたものや、ハンバーグ・メンチボール、うずらの塩だきなど、毎日私には食べきれなかった。医師も若い人から中年の人、それに女医さんがいて親切だった。看護婦も上、中、下に分かれ、注射、検温、軍医の回診に同行する者、配膳、掃除、排便の世話など任務が分けられ、だれもやさしく親切で、同室の将校の奥さんたちと片言のロシア語でお話をしたり、サンタルチアを合唱したりしたこともあった。三時のおやつに杏などの乾燥果物の入った甘い飲物が出たりして楽しくはしゃいだ。

入院してから大腿部に弾が入っているのはと、レントゲン検査を受けた。広い薄暗い部屋に寝かされた私は、上からいやな音をたてて機械が体の上に下りてくるので、そのまま体が切断されるのではと、がくが

くふるえが止まらなかつた。検査の結果、弾はどこにも見当たらなかつたそうで、左大腿部から爪先までギブスをあてられ、三カ月ベットに寝たまゝの生活だった。排泄は合図すると看護婦が便器を持ってきて始末してくれ、その点は難民収容所で缶詰の空き缶で汚すのを氣遣つて排泄していたことを考えたら、ほんとうにありがたかつた。

病院になれると、若い軍医が日本語を習いにきたり、ロシア語のアルファベットを教えてくれたりした。中年の軍医は、日本語で書いた共産主義の本を持ってきて、読むようにと置いていった。

昭和二十年も暮れに近づき、シベリアの冬の最もきびしいころ、ようやく左足のギブスもとれ、曲がらなくなつた膝を温めて曲がる訓練を受けるまでに回復した。そのころになると、若い看護婦たちに頼まれて、テーブル掛けやナフキンのドロンワークなどの手芸を手伝つて、皆に喜ばれた。十二月の末、院長によれば、松葉杖で院長室に入った。少し日本語がわかる院長は、精いっぱい好意を示して、ライターの金具をガチャ

ガチャ音をたてながら、

「サムライ腹切、アナタ長崎ゲンシバクダンオチタ。七十年クサ生エナイ。魚モスマナイ。」

アナタオトウサン、オカアサン、キョウダイ モウイナイ。日本モウナイ。ココデ看護婦スルトヨイ……」

と言つてくれたが、どうしても親の生死をこの目で見たいから帰してほしいと、片言のロシア語で懇願した。

博克図で丸坊主になつていた髪がのび出し、頭に白い布をかぶっていたが、若い軍医は日本の娘の珍しさにか、交際してほしいと言つたりしたが、敵国人に心を許す気はなかつた。でも、とても親切にしてくれ、菓子や身の回りの必要な品を持って時々、見舞いにきてくれた。退院するときも、大きな袋に石鹸やビスケットなど、そのころ、貴重な品を餞別に持つてきてくれた。

昭和二十年十二月三十一日、退院の許可があり、兵隊を一人つけて汽車に乗せてくれたときは、嬉しさ半

分、心細さ半分だった。外の景色はよく覚えていないが、汽車は粗末な椅子と真ん中にテーブルがあつて、食事をしながら旅行できるようになつていた。

兵隊と話した記憶はないが、満洲里駅に着いたとき、私を降ろしてくれた兵隊に「ありがとう」とロシア語でお礼を言つたら、それに答えて兵隊が「さようなら」と手をふつてくれた。

満洲里に

大晦日の三十一日、ソ連の兵隊に守られながら、私は吹雪の満洲里駅のホームに降り立った。丸坊主頭に防寒帽、ソ連の病院から支給された開拓団の防寒外套に制服、日本軍の編上靴は、どれもこれも私の体には超特大、体に合っているのは松葉杖だけ。知っている人の一人もいない満洲里駅のホーム、シベリア嵐を背に降り立った私には、大草原は余りにも広く遠く寒く、流れ落ちる涙をどうしようもなく、さめざめと一人でいつまでも泣いていた。

「どこからきたのか」とだしぬけに日本語で声をかけられて、我に返ると公安局員（警官）が立っていた。

事情を説明すると市長に電話して、町立病院に入院する手配をしてくれたが、途中、ソ連の兵隊に見付かると何をされるかわからぬから、今晩は自分の家に泊まるようすすめてくれた。親切に甘えてその家に行くと、奥さんと二人の子供がいて歓迎してくれ、ベッドに入つたが南京虫が壁伝いにはつてきて、一睡もできなかった。

翌日、満洲里市長に会つて、市民病院に入れていただいた。病院といっても、開店休業で入院患者は一人もいなくて、六十歳ぐらいの王という老夫婦が留守番を兼ねていて、食事を作つてくれた。昭和二十一年の正月は、王さん夫婦の好意でギョーザを一緒に作り、凍らせて保存しておくが、数日の間は、おなかいっぱい御馳走になつた。ふだんは高粱の御飯に人参の漬物だけの毎日だったが、時にはお米のお粥や唐きびのパンが、日本人に好意を持つている人から届けられ、今は日本人が一人もいなくなつた国境の街満洲里で、ともかくソ連兵にも現地人からも迫害を加えられない生活を送ることができた。

冬もようやく峠を越したころ、松葉杖も要らなくなつた。市長に勧められるまま、奥さんが小学校校長をしていて家事をする者がいないので、その家の掃除、炊事、洗濯から洋裁の手伝いをして、いくらかの報酬を得た。

蒙古人生徒との再会

ある日、突然蒙古人ドルジバクシが訪ねてきた。南屯の生徒たちは一度興安嶺に行った私がシベリアを経て、満洲里まで戻ってきていることを、だれからか聞いたのだろう。ドルジバクシは私が元気であることを喜んでくれ、日本に帰る途中、ぜひ海拉爾の街に寄つて皆に会うように伝えてくれた。

昭和二十一年も柳が芽吹く初夏のころ、ハルビンまで行く途中ハイラル駅に降りた。

南屯女子高校の蒙古人生徒たちは、坊主頭に布切れをかぶり、難民救済会から贈られた服を着た元教師を温かく迎えてくれた。

白雲空に 靡きて遠く

興安の嶺 連なるところ

ここぞ索倫旗われらの郷土
いざや燃えたつ王土に燦と

ここぞ索倫旗われらの郷土

彼らは声を張り上げ、習いおぼえた歌を歌ってくれた。テーブルの上にはシャルビン、(とうきびの粉で作ったパン)、羊肉、牛乳など、彼ら寮生活者にとつては、この上ない御馳走だった。二十年の八月九日、ホインゴール放牧地を出たときから、粗食に耐えてきた私は、彼らの好意が嬉しく、たくさん食べるよう勧めてくれるまま御馳走になり、生徒たちは九死に一生を得て、ソ連まで行つて無事帰ってきた私を、心から慰めてくれた。夜は最上の寝具を集めて寝かせてくれた上、皆でありつたけの持ち金を集めて、饑別に持たせてくれた。生理のときの用意にとの心遣いであろうか、綿花まで一緒に入れてあった。思いがけない生徒の思いやりにも、何と云つてお礼を言つてよいか：ありがとうの声も涙でよく言えなかった。生徒たちの真心こもつたもてなしに、一年前の八月以来の疲れも抜け、人情の温かさにホロリとさせられつつ、ハイラル

を出発した。

今度こそ、もう二度と会えないと思うと、列車がハラルを離れるのに、別れの言葉もよく言えなかつた。

苦難の思い出にみちた興安嶺を、まるで自分の墓場を通り過ぎる思いで、機関車は息をはずませながら坂を登った。今度こそは、この坂を越えることができそうだ。

日本人の住むハルビンで

やっとの思いでたどり着いたハルビンでは、南岗区のもとと青年学校だった校舎に、仮設された岩手県出身者の多い難民収容所のお世話になった。そこで献立表を作ったり、医師の鞆持ちをして死亡診断書を書いたりして、わずかな収入を得ていた。いよいよハルビンを引き揚げるとき、団長のすすめで岩手県出身の胸を病む婦人の付添いをした。石炭車に乗って夏の暑さもきびしく水も飲めず、カンカン照りの中、錦州までお供をしたが、介護のかいもなく、その方は亡くなられた。

引揚船に乗るため錦州までたどり着いたのだが、そ

の直後にコレラ患者が出たため、一カ月近く足止めされ、やっとコロ島から引揚船「高砂丸」に乗船した。

祖国へ

昭和二十一年九月二十日、はるかに遠かつた祖国は、快適な船のエンジンの音とともに確実に近づきつつあった。そのうち海の色も、次第に故郷、長崎のそれに似てきた。長崎は日本の入口にある。終戦時には、日本から遠いソ連国境近くの草原に住んでいたのが、今や帰るとなると長崎は日本で一番近い。その点、岩手や北海道の人は大変だと思った。

船の食事は、小さな食器に七分目ぐらいの大根の葉のまじった高梁の御飯だった。船員の中に弟の友人がいて、麦御飯や魚の煮付け、乾パンなどを持ってきてくれて、少ない食事でひもじかつた私たちは喜んで御馳走になった。風呂にも入れてもらって、皆さんに喜ばれた。

長崎県佐世保の町を目の前にして、船上でまたコレラが発生し、二十六日も上陸できず、船内の子供たちを学年別に分けて、歌を一緒に歌ったり、お話をして

やったりして、その日その日を過ごしていた。

ある日、思いもかけぬことが起こった。弟の友達が上陸用舟艇に乗って、夢にも忘れたことのなかった父を船までつれてきてくれた。

「アッ、お父さん」死んだと思って毎日位牌を拜んでいたという父は私を見て、声が出なかった。

「長子！よく生きていてくれた、もしかしたらどこかで無事でいるのでは……と思ったりはしたが、苦労したんだな！」と、後は言葉にならない。父が持つてきた柿栗芋などを、幼い子供のように歓声をあげて皆でむさぼりたべた。家庭のいざこざのために遠い異国に旅立ち、苦難の道乗り越えて帰ってきた娘に、父は涙で迎えてくれた。

昭和二十一年十月十六日、長崎県佐世保の浦頭港に上陸し、戦災で焼けたわが家には帰れず、家族の避難先にやつと着いた。南屯にいた姉は、避難途中チチハルで純子ちゃんとお腹の子を亡くし、ソ連に連れて行かれる寸前の兄と会い、運よく一緒に帰国していた。

教え子との再会

それから三十六年。昭和五十六年九月五日・六日、仙台松島でのホロンバイル会に出席したとき、奈良の伊藤秀夫氏が、蒙古で教えた生徒たちが私を捜していることを知らせてくださった。すぐ手紙を出したら折り返し返事が届いた。便箋三枚の手紙を読みながら、涙があふれて止まらなかった。

その手紙の主は、北海道札幌工業大学の研究員として留学中の、丹金蘇栄さんだった。当時、背が高く賢い目をして、白い羊の皮の蒙古服を着ていた。日本語の発音がきれいなので、いつだったか放送局主催のロシア、満州、蒙古、朝鮮族の日本語の作文放送コンクールにつれて行き、優勝したことを思い出した。昭和五十八年四月、化学の研究に留学中のアメリカから休暇を利用して来日した奥さんと二人、はるばる長崎まで訪ねてきてくれた。

佐世保駅まで迎えに行き、お互いの健在と、夢のように日まぐるしく変わった、お互いの環境に信じられない再会でした。蒙古の人には珍しい海をたつぷり見てもらおうと、絶景の九十九島巡り、見事なつつじの

咲き匂う北松鹿町の長串山を見、佐賀県の武雄温泉に一泊した。そこには、ビルトの蒙古人小学校の校長をしておられた田代正己先生御夫妻が待っていらして、その夜は遅くまで蒙古の話に花が咲いた。あくる日、田代先生御夫妻とお別れして、長崎市内を案内した。グラバー邸・大浦天主堂・芸能保存館、それに何といっても蒙古からのお客には、海が何よりの御馳走なので、船で長崎港を見て回り、とても喜ばれた。その夜は私宅で一別以来、精いっぱいのもてなしをして、三人で枕を並べて眠った。

昭和五十九年八月九日、長崎の原爆記念日に、今、日本に留学している蒙古人研究生十二人が、日本の各都市を研修旅行の途中、長崎に寄ると知って、会いに行つた。もちろん、その中に丹金蘇栄さんも含まれていた。観光が終わるころ、マイクロボスのガイドさんに指名されて、丹金蘇栄さんと二人で長崎物語を歌つた。そのあと、「星影のワルツ」を皆で歌つたが、歌っているうちに、ホロンバイル以来の私の半生の思い出が次々に浮かんできては消え、その苦難を思いもよ

らぬ日本での再会の喜びが、脳裏を駆けめぐって涙が膝を濡らした。バスを降りて別れるのがつらく、いつまでも気がぬけたように立っていた。その後、そのときの写真が、たくさん送られてきた。そして、正月には日本式に書いた年賀状が届き、当時の女子高校生で近隣切つての才媛だったホーム・マージャ・ハンドマさんたちからも次のような嬉しい便りがきた。

教え子からの便り

「なつかしい先生の手紙をいただいて、私たちは本当に嬉しく胸がいっぱいになり、先生とお会いしたような気持ちになりました。しかし、先生が終戦のとき、不幸に遭われたことを聞いて悲しみ、心が痛んで一日も早く元気になられるよう祈っていました。長い間、先生から便りがなかったし、また会うこともできないのを大変残念に思っていました。あのころの懐かしいお姿が、今でもはつきり眼に浮かんでくるのです。ホロンバイルは今、銀色にびかびか光っております。先生が第二の故郷、ホロンバイルの草原に再びこられるのを、先生の生徒たちは皆待っています。どうかおひ

でになる日を楽しみに待っています」 マージャ

「恋しい長子先生、三十六年間もごぶさたいたした。ハイラルの駅で師弟の情を惜しみながら涙で別れたあのときの情景と、なつかしき先生の面影は今でも浮かんできます。尊敬します先生、お体いかがでございますか。家庭も幸福であられると堅く信じています。私は先生の教え子であつたおてんば娘のマーニです。今、私も先生の深い配慮のおかげで幸福に日々を送っています。日中友好の日を迎えたその日、私はまず先生を思い出しましたが、先生の住所を知らず困っていました。マージャからの手紙で喜んでこの手紙を書いてます。私ども、先生の教え子は今でも、会うたびになつかしい昔の思い出を語り合っています。楽しかった舞踊の時間、そして体操の時間は、先生の元氣活発な号令に従つて、青空の運動場を駆け巡つたことが夢のようです。世間知らずのおてんば娘だった私も、二人の息子と一人の娘をもち、皆一人前に働いています。幸いに両国人民が友好を語る世の中になりましたが、私たちの心がけとしては、もっと深く師弟の

情をつらぬいて行きたいと思ひます。ゆえに先生の健康と幸福を祝賀している弟子が、海を越えて砂漠になる中国の内蒙古にいますと思つてくだされば、この上ない幸福だと思います」

一九八四年三月五日 先生の弟子 マーニ

遥かなる内蒙古をたずねて

教え子たちから、度々何通もの手紙がきて訪中を勧めてくるので、昭和五十九年ハイラル会のツアーに参加した。ハルビンで夕食後のアイスクリームにあたりて歩かれる状態でなかつたが、寝台車に寝たきりでハイラルに着き、生徒たちの大歓迎に病状が好転し、ハイラル賓館で開かれた歓迎会に出席することができた。

お土産をそれぞれ持つて行つたが、帰りにはたくさんのお土産をもらつて別れを惜しんで帰途についた。

平成三年九月、内蒙古自治区の首都フホトに教え子たちがそれぞれ要職について、会いたいと使があつたので、ちょうど機会があつたので行くことにした。内蒙古賓館での歓迎会では、懐かしい顔ぶれが三十人も集まり、とても感激した。司会をするオヨン

フさんは小学校四年生のとき、日本語の四カ国語弁論大会で優勝した思い出があった。

「九月十日は、我が国では教師の日です。ちょうど今ごろ、全国各地でいろいろな謝恩会が開かれています。今日、私たちは田中先生の歓迎会をしています、実際の意味において謝恩会でもありません。先生が今から五十年ほど前、我がソロン旗南屯小学校で教鞭をとっていました。本日、出席している皆さんはほとんど当時、先生の教え子あるいは、南屯女子国民高等学校の方です。実はフホトには先生の教え子が大勢いますが、仕事の関係や出張などで出席できない人もいます。先生がそのとき、私たちに日本語のほか日本の歌や踊り、体操など教えてくださいました。先生の教え子がその後、私たちの知識の本になりました。その御恩は一生忘れられません。終戦後、先生は大変な苦勞をなさいました。それにしても堅い意志と両手で生活の道を開きました。これもわたしたちの学ぶべきものであります。中国と日本とは一衣帯水の国であります。その国民である私たちも両国の友好のために一層努力

しましょう。先生！よくおいでになってくださいました。お会いできて本当に嬉しく思います。最後に先生の教え子でした皆さんを代表いたしまして、いつまでもお元気でお願いしますようお祈りいたしております」

一九九一年九月九日

オヨソク

皆で蒙古の歓迎の歌を合唱する中で、スカーフにのせた金盃の白酒をいただく。次に参列者の紹介があり、私も御礼のあいさつをする。花束贈呈やいろいろな贈物をいただき、たくさんの御馳走やぶどう酒に名残はつきず涙でお別れした。

【執筆者の横顔】

昭和十五年四月より十六年十一月まで、ホロンバイル（現中国内蒙古最北端の地区）の首都ハイラルから四十五キロの索倫旗南屯に住んでいた。ブリヤート族の部落に調査研究に行っていたころ、月に一回ほどハイラルに物資薬品購入に出掛けた際、南屯にあった高塚塾に立ち寄ったが、ここには常に十数人の蒙古娘が

寝食を共にしながら教育を受けていた。皆、はつらつとして日本式の教育を受けており、礼儀正しい娘たちであった。

昭和十六年夏、立ち寄ったとき、一人の娘が、「先生、川村先生がいらつしやいました」ときれいな日本語で言われたのには驚いた。

後で高塚さんから、「あの娘はガリダー（部落長）の娘で、旅順の日本人の高等女学校に通っているのです」と聞いた。

それから四十数年たった昭和六十一年、現地のナードム（祭）に旅した際、数人の老婆から松本先生（田中さんの旧姓）はどうしているか、是非一度きてもらいたいと言づてがあり、また平成四年バイカル湖の東のプリアート共和国の首都ウランウデに旅行したときにも、田中さんの教え子ドルスンが「私たちは先生と別れるとき、私が教えたことを忘れないようにと言われたことが、今でも耳に残っています」と、また日本人の若い教師とのロマンスも付け足しての話など、五十年を経た今日でも当時の教え子に慕われている。

教え子との文通が縁で、昭和五十九年また、平成三年九月招かれて訪中、絶大なる歓迎を受けホロンバイルの大平原に日中友好の花が咲き競っている。

田中さんの蒔いた種子の一粒である。

（岐阜県引揚者団体連合会

理事長 川村 一正）